

# M. ヴィグマンの創作スケッチ に関する一考察

朴 淳 香

## 1. 目的

マリー・ヴィグマン (Mary Wigman, 1886-1973, German) は、作品創作の際にスキッツェ (スケッチノート) を活用していた。創作過程は、创作者の個人的な思考の過程であり、活用されるスケッチノートも各個人によってその形態や目的も異なっている。ヴィグマンは、活動初期の頃から同じ形態で描き始めているが、第二次世界大戦以降の晩年期になるほど多く描いている点に特徴がある。

前提となる大きな目的としては、スキッツェを整理・分類することにより、スキッツェという物質的な側面を通してではあるが、創作過程を明らかにしていくことである。本発表では、スキッツェに記されている言葉について数量的に分析を行う。使用された言葉を統計上の位置を定め、表現することにより、その関係性から作品意図を探ることを目的とする。

## 2. 方法

「春の祭典」<sup>1</sup>、「アルチェステ」<sup>2</sup>の2つの作品を取り上げる。

1. 文献 [1] 及び、ベルリン芸術アカデミーにおいて95年夏に収集したスキッツェから動きに関する言葉を抽出し、テキストデータとする。

2. R. ラバンのエフォート要素に基づき、カテゴリーを設定し、分類する。

3. 数量化理論第Ⅲ類<sup>3</sup>により、カテゴリーの出現傾向を求める。

## 3. スキッツェの構成

「春の祭典」は舞踊音楽として作曲され、「アルチェステ」はオペラとして作曲されているが、いずれも劇的要素が盛り込まれている。書かれている言葉の傾向を調べたところ、2作品とも、音楽作品が本来持つ劇的要素から外れることなく、舞踊の内容が展開している。また、いずれも创作者の心理状態や進行状況をうかがわせる「感情表出語」が全体の1割前後にわたって登場している。特に「春の祭典」は、創作が思うように進んでいないと読み取れるような否定的な内容の言葉が多い。「動き」に関する言葉は全体の半数以上を占めていた。全体の流れとしては、アイディアの列

挙・覚え書きに始まり、リハーサルでの実践を通じて確実となるもの、批判的な検討を加えながら、あるいは疑問を持たせながらアイディアを練るといった経過を辿るもの等、作品完成への経過が記されている。

## 4. 結果と考察

数量化理論第Ⅲ類の実行結果は、「春の祭典」、「アルチェステ」ともに、第1軸については、エフォート要素を大きく2つに分かつ、Positive な側面と Negative な側面を弁別する軸として解釈することができた。第2軸以下等の詳細については、発表当日の提示資料をご覧ください。

数量化Ⅲ類の実行結果は、2つの作品に共通した第1軸の解釈を得た。この解釈が示していることは、2つの作品にプロットされている動きが、それぞれの作品について異なるものであるにも関わらず、動きの質レベルでは、同位に近いものであったということである。つまり、創作の過程で、振り付けが異なったものであっても、動きの質レベルにおいて、力性、時間性、空間性、流れにおいて、均質なバランスを持たせていたと考えられる。

## 〈主要参考文献〉

- [1] Steinbeck, D. ed., Mary Wigmans Choreographisches Skizzenbuch, Herausgeber Akademie der kunste, 1987
- [2] Laban, R. & Lawrence F. C., EFFORT, Macdonald & Evans, 1974
- [3] Laban, R. revised by Ullmann, L., The Mastery of Movement, Northcote house, 1980
- [4] Sorell, W., Mary Wigman ein Vermächtnis, Florian Noetzel Verlag, 1986
- [5] Wingman, M., The language of Dance, Wesleyan University Press, 1966
- [6] Wingman, M., ed and tr. by Sorellw, W., The Mary Wigman Book, Wesleyan University Press, 1973

1 'Le Sacre du Printemps' by Stravinsky 1957

2 'Alcestis' by Gluck 1958

3 Windows版SPSSを使用